

STS Network Japan 2003年度 夏の学校 ノーベル賞に見る科学と社会 お知らせ	p.02
『公共のための科学技術』合評会のご案内	p.05
代表就任にあたって 重松 真由美	p.06
STS Network Japan2002年度 春のシンポジウム 『技能知への視座』報告 三村太郎 感想 神出瑞穂	p.07 p.08
2003年度総会記録	p.10

NEWS LETTER

2003 VOL.14 No. **1**

STS NETWORK JAPAN

STSは、 Science, Technology, and Society の略称です

STS Network Japan 夏の学校2003

「ノーベル賞にみる科学と社会」

夏の学校2003のご案内

今年もSTS Network Japan 夏の学校を行います。今年の夏の学校の企画テーマは、「ノーベル賞にみる科学と社会」です。ノーベル賞を通して、科学や科学と社会のあり方を考えていきたいと考えております。なお、通常の研究発表会も予定しておりますので、ノーベル賞以外のテーマで発表する方の参加も歓迎いたします（もちろんNJ会員以外の方の参加も歓迎いたします）。

今回の開催場所は、伊勢志摩の「松嶋館」 (<http://www.matsushimakan.com/>) です。宿は海にも程近く、伊勢神宮のある伊勢市には電車で9分の距離という風光明媚な場所です。宿の3館あるうちの1館を貸切りで利用する予定でありますので、充実した時間を過ごせるものと思っております。

それでは皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。

夏の学校2003企画「ノーベル賞にみる科学と社会」

3年連続受賞、ダブル受賞、企業技術者の受賞など、ここ数年、ノーベル賞をめぐる話題はつきません。とくに昨年の田中耕一さんの化学賞受賞は、その個人的なキャラクターとあいまって、メディアを通じて全国的な話題となりました。

年に一回のイベントとして注目を浴びるノーベル賞ですが、その受賞対象や基準の変遷は、科学研究活動の流れを表しているとも言えます。またメディアを通じてとりあげられる研究者個人や研究活動は、日常的に研究者と接する機会のない人にとっては、研究者像・科学像を規定するものにもなります（田中さんの受賞は、企業研究者をクローズアップさせました）。さらにノーベル賞受賞者は、

国の審議会の委員に任命されたり、学会で指導的立場になることも多く、科学技術政策における影響も無視できません。このようにノーベル賞は、科学論、メディア論、科学リテラシー、科学技術政策などの様々な視点から分析する対象となると考えられます。

そこで、今年の夏の学校は、テーマを「ノーベル賞にみる科学と社会」といたしました。ノーベル賞を通じて、科学と社会の問題を多様な観点から議論したいと考えております。様々な問題意識を持った方の参加をお待ちしております。

日程：2003年8月1日(金)～8月3日(日)

会場：伊勢志摩 「松嶋館」

〒519-0602 三重県度会郡二見町大字江230-5

tel：0596-43-2009, fax：0596-43-2070

<http://www.matsushimakan.com/>

予算：1泊7,500円(3食付き)、2泊15,000円(6食付き)

アクセス：JR参宮線 二見浦駅 徒歩9分

(電車で)

名古屋から : JR快速みえにて二見浦駅(約2時間)

近鉄特急にて伊勢市駅まで(1時間20分)

→伊勢市駅からJR参宮線に乗り換え二見浦駅(9分)

大阪(なんば)から：近鉄特急にて八木駅乗り換え伊勢市駅まで(1時間45分)

→伊勢市駅からJR参宮線に乗り換え二見浦駅(9分)

京都から : 近鉄特急にて八木駅乗り換え伊勢市駅まで(2時間05分)

→伊勢市駅からJR参宮線に乗り換え二見浦駅(9分)

(車で)伊勢二見鳥羽自動車道 二見IC より約4分

申込みのスケジュールは以下のとおりになっております。

1)発表者(とテーマ)の受付 〆切 6月16日(月)

(とりあえず、資料が欲しいという方は、この日までにご連絡ください)

2)参加受付最終〆切 6月30日(月)

発表のない方は、この日までに応込みください。

3)問い合わせ先：STSNJ夏の学校2003実行委員長 小山田 和仁

(e-mail: office@stsnj.org, Fax：03-5454-6990)

4)申込先：STS Network Japan 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻 藤垣研究室気付

fax：03-5454-6990 E-mai：office@stsnj.org

※以下の申込書をファクスないし郵送でお送りください。

メールの場合も同様の書式でお願いします。

-----STS Network Japan 夏の学校2003 参加申込書-----

STS Network Japan 夏の学校2003に(参加します・プログラムを送ってください)※

氏名：

ふりがな：

所属：

性別：(男・女)※

会員：(会員・非会員)※

e-mail:

連絡先, 資料送付先：(所属先・自宅)※

所属先住所：

所属先tel：

所属先fax：

自宅住所：

自宅tel：

自宅fax：

発表：(する・しない) ※

発表される方のみ 講演題目：

※は該当するものに○

●編集委員からのお願い●

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局〈office@stsnj.org〉宛あるいは
skasuga@mars.dti.ne.jp
までお送りくださいますようお願い申し上げます。

〈編集委員・春日 匠〉

STSNJメーリングリスト のお知らせ

STSNJメーリングリストは、会員のみ参加いただけるSTSNJメーリングリストをご用意しています。

情報交換や議論に、幅広くご利用ください。

登録を希望されるかたは、事前に登録してあるアドレスで、お名前、ご所属、登録するメールアドレスを明記して、事務局〈office@stsnj.org〉までメールをお送りください。会員の方であるか確認ののち、手動で登録いたします（しばらくお時間をいただくこともあります）。

また、登録メールアドレスの変更は事務局〈office@stsnj.org〉までお願いいたします。

『公共のための科学技術』 合評会のご案内

日時：6月1日（日） 13:30-17:00

会場：東京大学先端科学技術研究センター13号館109号室

(最寄駅:小田急線・東北沢駅より徒歩7分、井の頭線・駒場東大前駅より徒歩10分)

なお、会場までの地図は先端研のホームページをご参照下さい)

<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/map/map-j.html>

*参加費、事前の申し込みは不要です。

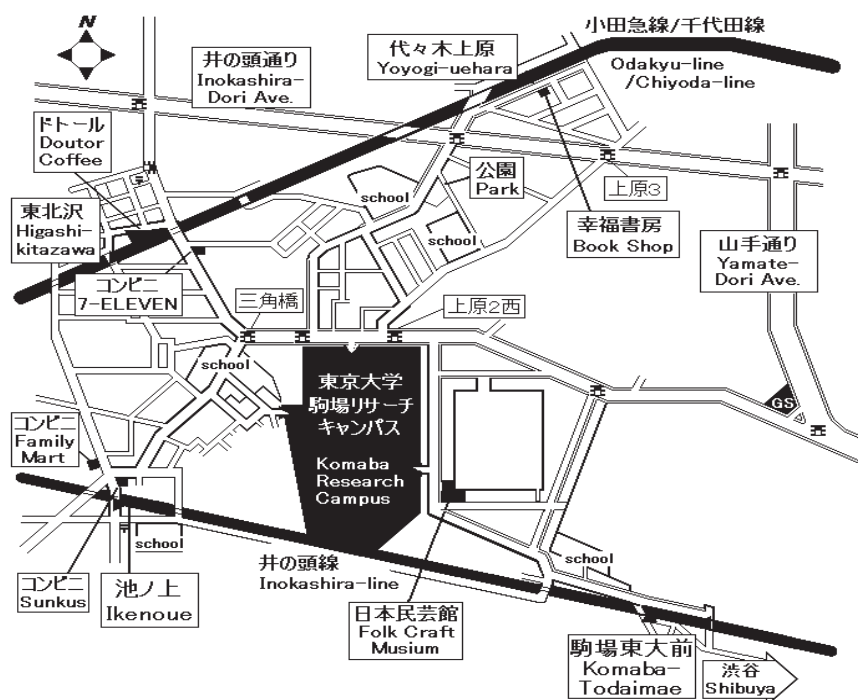
*STSNetworkの会員でない方もご参加いただけます。

昨秋に玉川大学出版会より出版された『公共のための科学技術』（小林傳司編）は、その執筆陣にSTS学会の中心メンバーの多くの名前を見ることができるところからも窺うことができるように、日本のSTS研究の現在の到達点を明瞭に示しているといえます。STS Network Japanでは、今回、そのような性格を持つ『公共のための科学技術』をめぐる、同書の執筆陣よりも下の世代に属する20代から30代の若手研究者による合評会を企画しました。

本合評会では、直接的には同書の合評というかたちをとりながらも、若手の世代がSTS研究の現状を批判的に検討し、将来を展望するための場にしたいと思っております。みなさまのご参加をお待ちしています。

評者：櫻本陽一（和光大）、綾部広則（産総研）、中村征樹（東大先端研）、
重松真由美（東大院生）

レスポンス：小林傳司（南山大）、木原英逸（国士舘大）、松原克志（常磐大）、
調麻佐志（東工大）、平川秀幸（京都女子大）



代表就任にあたって

東京大学大学院 博士課程
重松 真由美

STS Network Japanが発足して今年で14年目を迎えます。

1990年代を通じて、環境問題や原子力、バイオテクノロジー、情報社会、ノーベル賞、スペースシャトルといった科学技術に関連した話題が日常生活の中で多く語られるようになり、また、科学技術に関する社会問題に取り組む団体もまた増えてきました。こうした中、STS(=Science, Technology and Society)研究に対する社会的な期待も高まり、さまざまなところから注目されるようになってきました。

STSNJは発足以来、科学技術と社会の関係に対してリアルタイムで接してきました。STSNJの活動が土台となり、2001年10月に科学技術社会論学会(STS学会)が設立されています。また、STSNJは「学術団体」にとどまらない交流の場も提供してきました。シンポジウムや夏の学校の開催、Year Bookの発行、News Letterの発行、メーリングリストの運営といった活動を通じて、緩やかなネットワークをつくってきました。

現在、STSNJにはさまざまなバックグラウンドを持った学生や研究者、教員、政府関係者、ジャーナリストの方など230名余の会員が参加しています。地道な活動を続けながら活動の方向性を見いだしていくとともに、会員のみなさまをはじめSTSに関心を持ちそして実践しているさまざまな人を巻き込んで、柔軟に「STSNJネットワーク」を形成していけたらと思います。

このたび代表という大役を引き受けることとなりました。どのようなことができるか分かりませんが、交流・対話の場としてのSTSNJの活動を盛り立てていく所存です。至らない点も多いと思いますが、1年間どうぞよろしくお願いいたします。

STS Network Japan 2002年度 春のシンポジウム

『技能知への視座』報告

三村太郎（東京大学）

日時：2003年3月22日（土） 13:00～17:30

場所：東京大学先端科学技術研究センター13号館3階講堂

講演：

上野直樹氏（国立教育政策研究所）

西阪仰氏（明治学院大学）

コメンテーター：

橋本毅彦氏（東京大学）

今回のシンポジウムでは、タイトルからも窺えるように、「技能知」というタームを中心にすえた。実のところ、本シンポジウムのコーディネートに当たって、この「技能知」をいかに解釈するかという大問題を、講演いただく皆さんにお任せしてしまい、こちらからの統一見解を提示せずに進めた。このような進め方をとったのは、コーディネーター自身が、「技能知」に関してはっきりした見解を持っていなかったことが大きな理由であったが、同時に、解釈をオープンにすることで、多様な見解を並行させ、相違点を明確にできるのではないか、という期待も含んでいた。また、多様な知見を得るためにも、できるだけSTS関係でない方を講演者にすえようと、今回、上野直樹さんと西阪仰さんに講演をお願いすることになった。

コーディネーター自身は、科学的知識に還元できない「技能知」の性格の探求を目指していた。すなわち、古来、一般の人々に尊敬され、あるいは畏怖された「技芸」「技能」とは何か、さらには、なぜ技能知を持つものは尊敬され畏怖されたのかを、技能知の振る舞いを見ることで理解できるのではないか、という期待を持っていた。

まず、上野直樹さんから、「社会システムとしての技能」という題で講演いただいた。具体的には、コピー機修理をめぐる状況をとりあげることで、社会システムとしての修理技能という側面を明確にいただいた。コピー機の修理とは、ただコピー機を修理するというだけではなく、コピー機を取り巻く社会システム（具体的には修理担当者のサービスエリアを軸とした社会システム）を修理している、という視点を上野さんは提示した。その際、修理にまつわる知識が、その社会システムに影響を受け、知識の社会的組織化といった現象が見受けられるという。まさに、技術の中心たるコピー機を扱う際、コピー機のみをじ

かに扱っているのではなく、それを取り巻く社会、いわばコピー機の設置されている舞台を修理し、かつその舞台設定に依存しているといえる。

つづいて、西阪仰さんから、「対象の組織化-暗黙知について」という題で講演いただいた。暗黙知という概念は、使い勝手がいい反面、たいへん危険な概念だという。そこで、まず、想像のイメージへと考察を向ける。いわく、イメージとはそもそもロケーションを問えるものではないが、一方で、何か目の前にある感じがするという。その際、子供たちの言い争いなどにおける会話とそれに伴った動作の綿密な分析を通じて、「環境に埋め込まれた身振り」（ある種の環境においてはじめて意味を持つてくるような身振り）を浮かび上がらせる。さまざまな事例の考察を通じて、西阪さんは、「イメージを見る」際、ある舞台をセッティングして、道具や身振り（活動）を伴うことで、イメージを実際の目で見ているのである、と結論付ける。そういった「環境に埋め込まれた身振り」を軸に、いままだ暗黙知として提示されてきたものが、じつは暗黙（頭の中）で知られていたのではなくて、ある種の環境や活動に依存して知っているものであって、いわゆる知識とは「知り方の違う」ものではないか、と示唆する。

最後に、橋本毅彦さんから、コメントをいただいた。その際、歴史学の場合、どうしても文献中心となるため、対話・身振りといった側面をシャットアウトしがちだという。その中で、実験プロセスを克明に残したファラデーに関する研究は、成功した例だという。

以上、お三方に多様な視点を提示していただいたのだが、コーディネーターにとってたいへん興味深かったのは、ある種の状況（舞台）に依存した知、という見方である。西阪さんの講演から、まず、知とは、舞台・動作・発話に依存するものであることが分かる。さらに、上野さんの講演から、ある種の知（上野さんの例ではコピー修理技能）が、舞台（サービスエリア）に依存し、さらには、その舞台を動かす（修理する）ことがわかった。

以上の考察を敷衍してみれば、一般的に知が舞台に依存しているとすれば、尊敬され畏怖される「技能知」とは、舞台に依存しているだけではなく、さらに舞台を動かすことができるほど強力な知（とそれにとまなう活動）だった

シンポジウム感想

神出瑞穂 (科学技術・生存システム研究所)

kamide-mizuho@max.hi-ho.ne.jp

のではないかと。言い換えれば、そういった力を持った知こそが「技能知」だと性格づけることが可能なのではないだろうか。

そして、西阪さんが挙げた自転車の例は興味深い。いわく、我々は自転車の乗り方を知っている一方で、ある曲率でバランスをとっているという事実を提示された際、「すごい」と思ってしまうだろう、と。この例は、まさに、技能知と科学知の差異を際立たせているように思われる。技能知が、舞台を動かすとはいえ緩やかに動かす一方で、科学知は、なかば強引に舞台を動かす、いやむしろ舞台を書き換えることで、それまでの動きを乗り越えていってしまう。いわば、科学知は、曲率といったようなロゴスで特徴付けられるある種の強力な言語で舞台を書き換えてしまうのではないかと。そういった科学知によって書き換えられ、揺り動かされた度合いの大きさに直面して、人間は「すごい」とつい漏らしてしまうのではないだろうか。

このように、知っているとは何か、また、技能を発揮するとは何かを、多くの事例を眺めることで、ようやくその振る舞いの輪郭が見えてきた。大いなる収穫を胸に、より鮮明に、技能知を探求し、語り続けなければならない。

複写機 (P P C) の技術史からみた わが国の技術知の特徴

1 複写機の技術略史

米国オハイオ州コロンバスにバツテル記念研究所 (N P O) がある。ここの業績のひとつに複写機原理の発明がある。小生がここを訪れたとき広報担当のスタッフは誇らしげに滔滔と説明してくれた。チェスター・カールソンはもともとベル研の特許部に勤務していたが、特許書類作成の非能率さを体験しバツテル研で複写機の開発に挑戦する。試行錯誤の末、ついに1938年感光ドラム静電転写方式を開発した。彼は特許弁理士でもあったのでその発明はしっかり特許化された。これが世に有名な「カールソン特許」である。この特許を購入してゼロックス社は米国で1959年普通紙対応の事務用複写機を商品化する。この製品は実に2000件以上の周辺特許でガードされていたので他社の進出を許さずゼロックス社は大いに業績を伸ばした。この点は特許権利史としても有名である。わが国ではF社と合併で1962年サービスが開始された。国産初の普通紙複写機(C社電子写真方式)が商品化されるのは実に8年後の1970年のことである。それから基本特許が20年を経過し切れたこともあり続々国内メーカーがこの分野に参入し複写機事業は事務機業界の大きな柱に成長、日本のお家芸になった。その後、写真の複写などコピー品質の改良、コピースピード改善など技術競争が進んだ。1990年代に入ると大きく4つの技術革新を迎える。第1は1997年から始まったデジタル化、第2はカラー化、第3はFAX、プリンター、スキャナーなどとの複合化、第4はインクジェット方式などによる、家庭用、個人用パソコン端末化である。特にデジタル化により拡大縮小ほか編集機能は大幅に拡大した。さらにiトロンOSの導入、ネットワーク化などの進展をみて21世紀を迎えた。環境問題との関連でトナーカートリッジのリユース、リサイクルの動きも忘れてはならない。

ジアソなど湿式複写方式の歴史は除くと以上がP P C複写技術の概略である。

2 わが国の技術知の特徴

そもそも複写機は読み取り部、感光、定着部、複雑なメカ部、電子回路部、紙、トナーなどからなるシステムで、当初コピー品質の変動が大きくまた紙という“生物

“を扱うために紙詰まりなど故障が多かった。複写機事業がレンタル方式で始まったのも機械が高価であったこと、トナーとコピー用紙の継続的供給の必要性もあるが、常にメンテナンスを必要としたからであった。6、70年代にはサービスマンが真っ黒になりながら、感光ドラムをクリーニングしたり補修用7つ道具を広げて部品を交換する光景が良く見られたものである。

それでも複写機事業は“おいしい事業”で急速に発展してきた。

では日本の企業はこの市場にどのような技術知で進出したのであろうか？

第1は商品コンセプトの差別化である。当初米国のゼロックス社の機械は畳2畳分弱ほどの大きさがあり、官庁、大学、企業の図書館などに1台設置、そこでユーザ側の専門スタッフが大量に複写する集中処理型のものであった。そのほうがメカサービスマンの人数も少なくすむし、機械の稼働率もあがるので経営的にもメリットがあった。日本のメカは小型化し、安価にしてオフィスの一部屋ごとにおいてもらう、さらには家庭用複写機まで想定した商品コンセプトを持っていた。いわば分散処理のコンセプトである。日本の合弁のF X社の話でも米国のX社は小型化には当初消極的であったとのことである。集中処理ビジネスモデルで利益があがるのになぜ分散方式のリスクに挑戦しなければならないかというスタンスであった。奇妙なことにこれと類似の話はV T Rの歴史にもあった。世界で最初に放送用V T Rを開発したのは米国のアンペックス社であった。結果として家庭用V T Rの世界市場の95%を占有したのは日本のメカであった。この点は国民性の違いかもしれないが今後技術史的に研究すると面白い分野である。

第2は第1の商品コンセプトを実現するための技術知である。大型・集中型と同じだけサービス、メンテナンスがかかっているのは小型・分散化は不可能である。出来るだけメンテナンスフリー、または専門知識を必要としないメンテナンス技術を開発した。トナーのカートリッジ化、部品のモジュール化などである。前述のC社による1970年の国産初のP P C複写機の事業化にあたってはT G（トータルギャランティ）方式という新しい保守サービスシステムを開発した。これは一切の消耗品、サービスパーツ、保守サービスを保証する代わりに複写使用枚数に比例した料金を徴収するシステムで、いわばサービス、メンテナンス業務のモジュール化であった。（C社の資料による。）

第3は木目の細かいノウハウの技術知である。そもそも日本はカメラ産業が盛んで画像処理に関しては伝統的に鋭い感覚とノウハウを有している。複写のコピー品質さらにはカラー化などの“色の道”にはカメラ技術・ノウハウの技術移転と更なる磨き上げがあった。複写機はデジタル化

してハード・ソフト・ネットワークの3次元商品に進化をとげつつあるが、日本の技術知はそれらが別々に発展するのではなく技術・ノウハウというソフトがハードの中にとけ溶け込む点に特徴があるようである。IT業界にはソフトソフト（たとえばP Cのアプリソフト）、ハードソフト（ハードを動かす制御用ソフト）、ソフトハード（前述のようなハードの中に溶け込んだソフト・ノウハウ）という言葉がある。これらのソフトの発展がこれからの国際競争の中での日本の技術知の優位性に関係して来よう。

最後に「スマイルチャート」現象について言及する。この言葉は台湾のパソコンメーカーの社長がハーバード・ビジネス・レビューに論文を掲載し世界的に有名になった言葉である。X軸に部品、製品組み立て、流通、サービスをとりY軸にパソコンの純利益を取ると、部品で63%、組み立てで15%、流通で1%、サービスで21%とちょうど笑ったときの口の形になることからスマイルチャートと名づけた。有名になったのはパソコンだけでなくあらゆる機械製品がマイコン、L S I化により部品に付加価値がつき、それが小さい組み立ては中国ほか人件費の安いところで行わざるを得なくなり、生き残る道はサービスにあることを予測したからである。複写機においても、まだ精密機械ゆえ、組み立ての付加価値はパソコンより高いと思われるが大局的には複写トータルサービス事業の方向を志向するものと思われる。その中にはネットワークにより個々の複写機のトナー、コピー紙の残量検知、リモートメンテナンスと自律的修理など新しいサービス形態も含まれるであろう。

S T S - N Jの春のシンポジウム（3月22日）で上野直樹氏よりコピー機の性能は社会システムの性能であり、そのサービス・メンテナンスは社会の安定性を増すという含蓄のある発表を拝聴した。その内容に触発され以上複写機の技術知につき言及した次第である。

2003年度総会記録

(文責：重松 真由美)

2003年3月23日

於：東京大学先端科学技術研究センター 13号館

(1)2002年度事業

- ・夏の学校「理工系大学教育の現在」
2002年8月16日～18日 @千葉・岩井海岸
参加人数 40名, 発表者数 12名
- ・冬のシンポジウム「ユニバーサルデザインの可能性」
2002年12月21日 @東京大学先端科学技術研究センター
- ・春のシンポジウム「技能知への視座」
2003年3月22日 @東京大学先端科学技術研究センター
- ・研究発表会
2003年3月23日 @東京大学先端科学技術研究センター
発表者数 7名
- ・Newsletterの発行 4回
(2002/5/17, 2002/10/10, 2003/2/24, 2003/3/21)
- ・YearBook2000の発行(2002年4月)
「工学教育改革とSTSの可能性」(1999年11月開催)
「エネルギー政策をリスク論から考えるーJCO 臨界事故の再検証と「不安」の評価ー」(2000年3月開催)
の2つのシンポジウムの記録を掲載したYearBook2000を発行し、2000年度会員に発送しました。
- ・Yearbook2001を発行できず
「大学独立行政法人化問題とは何か」(2001年3月開催),
「科学技術ジャーナリズムへの期待」(2001年11月開催),
「STSから考える市民運動」(2002年3月開催)
の3つのシンポジウムの報告を1冊にまとめて2002年度中に発行の予定でありましたが、編集が遅れ発行できませんでした。大変申し訳ありません。早急に編集を終えて、2001年度の会員にお送りしたいと思います。
- ・シンポジウム報告集を発行できず
2002年度の総会では、シンポジウムの速報性を重視して、シンポジウムごとに報告集を発行することを提案し、了承されました。しかしながら、「ユニバーサルデザインの可能性」(2002年12月開催)の報告集は、事務局のミスによりシンポジウムのテープ記録ができなかったため、発行を見送ることになりました。大変申し訳ありません。
「ユニバーサルデザインの可能性」のシンポジウムの内容については、シンポジウム当日のレジュメやニュースレターに掲載した報告を、「技能知への視座」(2003年3月開催)のシンポジウム報告集に掲載する予定です。

・事務局会議 6回

(2002/4/18, 2002/6/30, 2002/9/9, 2002/12/20, 2003/2/26, 2003/3/21)

(2)STSNJの状況

会員数 229名(入会17名, 退会7名)

(3)2002年度会計報告

(2002年度会計：服部恭子, 会計監査：野沢聡)

※()内の金額は、昨年度総会で提案された予算案の金額

<<収入>> (2002.03.21～2003.03.22)

前年度繰越金	1,052,249円
会費 (のべ161名分)	564,500円 (525,000円) +39,500円
Yearbook売上	108,440円 (150,000円) -41,560円
夏の学校2002黒字	40,080円 (0円) +40,080円
※夏の学校会計報告参照	
その他 (寄付など)	0円 (0円)
年度小計	713,020円 (675,000円) +38,020円
合計	1,765,269円 (1,727,249円) +38,020円

<<支出>> (2002.03.24～2003.03.22)

News Letter発送費	157,970円 (168,000円) +10,030円
※NL印刷・郵送・バイト代x4回発行	
Yearbook2000印刷費	189,720円 (180,000円) -9,720円
Yearbook2000発送費	30,450円 (50,000円) +19,550円
Yearbook2000 発送バイト代	4,000円 (10,000円) +6,000円
Yearbook2001印刷費	0円 (300,000円)[+300,000円]
※2002年度中には発行できず	
Yearbook2001発送費	0円 (50,000円)[+50,000円]
Yearbook2001 発送バイト代	0円 (11,500円)[+11,500円]
シンポジウム報告集2002印刷費	0円 (100,000円)[+100,000円]
※2002年度中には発行できず	
シンポジウム報告集2002発送費	0円 (50,000円)[+50,000円]
シンポジウム報告集2002バイト代	0円 (11,500円)[+11,500円]
事務局会議開催費	18,347円 (40,000円) +21,653円
※年6回開催 (4/18, 6/30, 9/9, 12/20, 2/26, 3/21)	
シンポジウム・総会経費	46,351円 (83,000円) +36,649円
※総会 1,608円; 冬シンポ 29,002円; 春シンポ 15,741円	
通信費	61,450円 (10,000円) -51,450円
※NL以外の郵送料、振込手数料	
雑費 (封筒・文具等)	28,831円 (35,000円) +6,169円
テープおこし	60,420円 (120,000円) +59,580円
レンタルサーバー代	23,265円 (25,000円) +1,735円
年度小計	620,804円 (1,244,000円) +623,196円
次年度繰越金	1,144,465円 (483,249円)

合計 1,765,269円 (1,727,249円)

夏の学校会計報告(独立会計)

<<収入>>

参加費(40名) 448,950円

寄付 30,000円

計 478,950円

<<支出>>

宿泊費・食費 377,055円

交流会費 58,051円

雑費(文具等) 3,764円

計 438,870円

合計 +40,080円

※なお、黒字分はSTSNJ会計に組み込みました。

注)

1.今年度よりYearbook会計を統合しました。YB2000の発送以外のYB収入・通信費は全体の会計の中に入っています。

2.Yearbook在庫整理、在庫売り出しをしたので(他学会において;MLでの紹介;Yearbook3冊以上まとめ買いの場合、一冊につき300円引きであることをHPでもお知らせ)、在庫の売り上げが結構ありました。今後も継続していく価値はありそうです。

(4)2003年度人事

代表:重松 真由美

事務局長:野澤 聡

会計:三村 太郎

会計監査:土畑 重人

庶務(YearBook管理):中村 征樹

文書掛(NewsLetterの印刷・発送):加藤 源太郎

夏の学校実行委員長:小山田 和仁

編集:春日 匠, 隠岐 さや香

WebおよびML管理:夏目 賢一

記録:浅見 恵司

庶務(名簿担当):重松 真由美

(5)2003年度事業計画

・夏の学校(実行委員長:小山田 和仁)

副実行委員長:重松 真由美

8月1日(金)~3日(日)を提案

関東以外の地域で開催,

テーマなどは未定で、詳細は次号ニュースレターにて

・シンポジウムなど

例年行っている秋と春のシンポジウムの年2回を軸にして、小規

模なシンポジウムやSTS関係書籍の書評会などを企画・開催することを計画しています。

→5月末から6月頃に書評会を企画しています。詳細は次号ニュースレターやMLにてご連絡します。

・NewsLetterの発行(年4回)

・Yearbook2001の発行

・シンポジウム報告集の発行

「技能知への視座」報告集(+「ユニバーサルデザインの可能性」)2003年秋のシンポジウム報告集など、2003年度内に開催したシンポジウムの報告集を発行

・ニュースレターの電子媒体について

MLにて議論のあったニュースレターの電子媒体の発行および会費の削減について事務局で検討しました。

電子媒体の発行の方法として、現時点として(1)Webにてダウンロード、(2)添付ファイルにて送付、(3)MLを開設しているe-groupsのフォルダからダウンロードの3つの方法があります。

(1)については、現在、STSNJのWeb(<http://stsnj.org/nj/NL-PDF.html>)にて、過去のニュースレターを1号遅れで公開しております。1号遅れとなっているのは、会員、非会員の差別化を図るためです。

(2)については、ファイルが800KB前後と大変重いため、あまり現実的ではなさそうです。

(3)については、STSNJのMLを開設しておりますe-groupsのフォルダに、最新のニュースレターのファイルを置き、電子媒体を希望の会員方にメールでお知らせを流し、フォルダに直接アクセスしていただく方法です。この場合、MLの加入が会員限定となっておりますので、非会員との差別化は図れると思います。

以上の検討から、(3)の方法が一番現実的なものであると考えています。

電子媒体発行に伴う会費削減については、実際にどのくらいの数の会員が電子媒体によるニュースレター発行を希望しているのか、またどの程度の会費削減が可能であるのかなど検討することが多く、短時間での議論では判断できませんでした。

そこで、2003年度は電子媒体の発行を試験的に行い、様子を見て来年の総会(2004年3月)でどのように運営するか提案したいと思います。この件について、意見がある方は事務局までご意見をお寄せください。

(6)2003年度予算案

※()内の金額は、2002年度決算の金額

<<収入>> (2003.03.23~2004.03.)

前年度繰越金 1,144,465円

会費	550,000円 (564,500円)	雑費 (封筒・文具等)	35,000円 (28,831円)
Yearbook売上	120,000円 (108,440円)	テープおこし	120,000円 (60,420円)
寄付など	0円 (40,080円)	レンタルサーバー代	25,000円 (23,265円)
<hr/>			
年度小計	670,000円 (713,020円)	年度小計	1,144,500円 (620,804円)
<hr/>			
合計	1,814,465円 (1,765,269円)	次年度繰越金	669,965円 (1,144,465円)
<hr/>			
		合計	1,814,465円 (1,765,269円)

<<支出>> (2003.03.23~2004.03.)

News Letter発送費	160,000円 (157,970円)
※NL印刷・郵送・バイト代	
Yearbook2000印刷費	0円 (189,720円)
Yearbook2000発送費	0円 (30,450円)
Yearbook2000 発送バイト代	0円 (4,000円)
Yearbook2001印刷費	300,000円 (0円)
Yearbook2001発送費	50,000円 (0円)
Yearbook2001 発送バイト代	11,500円 (0円)
シンポジウム報告集2002印刷費	100,000円 (0円)
シンポジウム報告集2002発送費	50,000円 (0円)
シンポジウム報告集2002バイト代	11,500円 (0円)
シンポジウム報告集2003印刷費	100,000円 (0円)
シンポジウム報告集2003発送費	50,000円 (0円)
シンポジウム報告集2003バイト代	11,500円 (0円)
事務局会議開催費	25,000円 (18,347円)
シンポジウム・総会経費	80,000円 (46,351円)
通信費	15,000円 (61,450円)
※NL以外の郵送料、振込手数料	

<<会場からの意見など>>

- ・会員数の拡大をめざして、活動を工夫して欲しい。
現在の会員数が230名ほどだが、300名をめざしてほしい。そうすれば、活動を安定させることができると思う。
- ・Yearbookおよびシンポジウム報告集については、戦略的にやって欲しい。また、今回の研究発表会の報告集も検討して欲しい。

『ハイテク社会を生きる』

調 麻佐志・川崎 勝・平川 秀幸編著

北樹出版, 2003, 2000円

編者+塚原東吾氏の4名のSTSNJ会員を中心として、北樹出版から『科学技術時代への処方箋』に続く表題の本を2003年の3月に出版いたしました。今回は豪華ゲストとして、作家の瀬名秀明氏、超常現象の心理学の菊池聡氏、だめ連の矢部史郎氏に参加していただき、手前勝手ながら面白い本ができたと思っております。本書の狙いは、科学技術を巡る大きな問題のことは忘れて、我々が日常で直面するような社会的には小さな（しかし、個人にとっては大きな）問題を考えるヒントを高校生でも読める文章にして提供することであり、以下のような章立てとなっています。ご興味をお持ちの方に一読いただければ幸いです。

序章

- 第1章 2つの文化という神話
- 第2章 科学はなぜ嫌われるのか
- 第3章 科学と擬似科学のハザマで
- 第4章 科学リテラシーって何だろう
- 第5章 デジタルデバインド試論
- 第6章 遺伝子組替え作物は飢餓から世界を救えるか
- 第7章 病院：2つの世界の邂逅の場
- 第8章 だめ連という運動
- 第9章 そして、科学技術社会を生きる

<庶務(名簿担当)からのお願い>

お引越し、ご所属の変更、ご結婚、区画整理などで、ニュースレターのお届け先が変わる方は、変更前と後の郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、e-mailアドレスを事務局あてに、郵送かFax、e-mail<office@stsnj.org>にてお知らせください。また、STSNJのWebSite (<http://stsnj.org/cgi-bin/application/>)において、会員

情報の変更を行うこともできます。

住所変更の手続きを行っていない方が多く、たくさんの方のニュースレターが事務局あてに返送されています。

会費納入について

このニュースレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「02,03未」と「03未」は、それぞれ該年度の会費(3500円)が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「03不足」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数字が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間ですので、送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。

会費は以下の口座にお振込みください。

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 3,500円)

なお、振込用紙の通信欄に以下の点を明記してください。

(1)何年度会費(新規入会の方はそうお書きください)、(2)お名前、(3)ご所属、(4)ご連絡先(住所・電話番号・e-mail)

※新規入会のかたの会費は当該年度のものとして扱わせていただき、何月の入会であれその年のニュースレター全4号ぶんと、イヤブックが送付されます。



編集後記

Newsletter Vol.14, No.1 (通巻No.50)
2003年05月25日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter編集委員会

代表 重松 真由美 / 委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 重松 真由美

STS NETWORK JAPAN 事務局
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
広域科学専攻広域システム科学系
藤垣裕子研究室気付

FAX:03-5454-6990

E-mail: office@stsnj.org

WebSite: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 3,500円)